



随

想

西宮の「茶新」物語

岩崎 博

毎年十日戎には西宮神社にお詣りするところが西宮に住む者には一つの慣例となっている。

正面をはいってすぐ左側に台付の古い大石燈籠がある。刻まれた文字も段々読みにくくなっているが「天保七丙申九月」と記され、寄進者の中に茶臼屋新右衛門の名が

見える。誰も気にとめないこの古い大石燈籠の前に立つたばに私は一人の友を思う。

西宮はある意味で歴史の町である。私は西宮の歴史に興味を覚えるようになったのは同志社中学の同窓・野田三蔵君と交りを入れてからである。同君は西宮での最も古い家柄といわれ、祖先は遠く大阪の陣で真田幸村の輩下で活躍し、天王寺で討死した部将の一人である。大阪落城後残された妻と幼い娘は徳川方の目を逃れて大阪市内に長くかくれていたが、娘が成長するに及んで、父が幸村に従って九度山麓に蟄居していた当時の縁故で一人の武士と結婚し、茶臼山に手習師匠をして暮していた。この間、女兒と男児が生まれた。

しかし間もなく夫が病死したので老いた母と二児をつれて西宮の知人を頼って移住することになった。寛文三年（一六六三年）のことである。爾来、西宮に住みつき男児が長じて茶臼屋新右衛門と名乗った。茶臼山から移住して来たので、これを屋号としたのであろう。それからこの茶臼屋は何代と続くわけだからこの人を初代とした。商才のあった人に見える、世間からは「茶新」

と呼ばれそれが通り名になってしまった。いうまでもなく、茶臼屋新右衛門の頭文字だけをとった呼称である。明治になって茶臼屋は現在の野田姓を名乗ることになった。

西宮は「宮水」で有名であり、これが銘酒灘生一本の秘密である。茶新の住んでいた西宮の浜脇及び久保町、鞍掛町附近はこの宮水に恵まれ、従って酒造家としても古くから知られていた。前太平洋戦争で西宮も空襲を受け野田家の酒蔵も爆撃されて焼失した。その時残った棟木に寛政三年の文字がはっきり刻まれていたのでこの酒蔵が当時造られたものであることが証明された。

徳川時代、この辺りは西国大名の参勤交代の要路に当たっていた。各大名が一度に来た時など野田家もたびたびこれら大名の宿となった。その都度、羽織、袴、帯刀で出迎うのは名譽ではあったが、有難迷惑なこともあった。当時、かげでこんな唄がうたわれていた。

いやな泊りは鍋島、薩摩

暮六つ泊りの七つ立ち

幕六つといえは今の六時、夕方の丁度忙しい時にやって来て、朝の七つ即ち午前四時に出立するというので全く迷惑千万だったわけで、これを常習にしていた鍋島や薩摩の殿様が毛嫌いされた一面がうかがえて面白い。

真田幸村の家臣として信州上田からついで来て大阪の陣で戦死し、その遺族が西宮に移り住んで幾世紀、その間の野田家の歴史の足跡は、西宮神社の古い石燈籠、満谷、墓地その他西宮の各所に見ることができ。歴史の好きな私達は西宮市内の歴史散策を試みるのを楽しみにしている。

(昭和四十七年十日戎の日)

(西宮在住、著述業。大正七年中学、十二年大学経済卒)

心の貧しい人

河野 収

「心の貧しい人は幸いである。天国は彼

らのものである」(マタイ5の3)「心の貧しい人」(Die Armen im Geiste)とはどういう意味か。昨年、工学部の学生諸君とドイツ語訳の新約聖書を読んだので、語学試験に各自の見解を述べてもらった。いろいろな解答があったが、そのうちから主なものを挙げてみよう。

「心の貧しい人は、心の豊かな人にくらべ神にすがって慈悲を請う心が強い。神は助けを求める貧しい者のみ救済し、至福を与える。」この解釈は「心の貧しい人」の説明が不十分な上、「心の豊かな人」をよい意味で使っているのかどうかも漠然としている。これに反し、はっきり定義づけている者は、「心の迷える人」、「自分の非力や欠点に気づいている人」と説明する。極端な解釈者は「悪しき人」、「罪深き人」と考え、そういう人にもイエスは価値を見だし、救って下さるので幸福であると述べる。次の変わった意見も紹介しておこう。

「われわれは生まれて以来いろんな術を習い覚えたが、結局そんなくだらん事を心得ている者よりは、もっと素朴な、つまり貧しい心を持った人の方が幸せだ」と、経験

や学問を否定する論者も一人いた。

他方、「経済的な貧困者」と考察する者もかなりあった。勉強家はマタイ19の24を引用して、「金持はいろいろ物欲があり、ラクダが針の穴を通るよりむずかしいと言われているように、神の国にはいりにくい、貧乏人はそうでないから幸福である」と言う。(どの聖書も「ラクダ」となっているが、ネストレのギリシア語聖書によれば、kamios「繻綱」という異文も示されていて、私はこの方がよいと思う。)しかし私の心をとらえたのは次の解釈であった。「心の貧しい人、つまり俗っぽい欲望のない人は幸福である。なぜならば、人はこのような欲を捨ててこそ、天国を見ることが出来るからである。」私はクリスチャンでも、専門家でもないが、この解釈に賛成である。さらに補足すれば、プロレタリアがよくて、ブルジョアが悪玉というのではない。富者にあっても、持たざるように生活すること、換言すれば、ものに心を失なってはならないということであろう。金や名誉にとらわれない人、現世第一主義でない者は、また信仰心の篤い人でも

ある。

このような解釈に立って「心貧しき者」を「己に打ち克つ者」、「神に頼る敬虔な者」、いつそ「心富める者」と改訳すれば、素人には理解しやすいかも知れない。だがヘブライ語、ギリシア語からの伝統の「貧しい」というニュアンスのある訳語をかえるよう要求するのは、解釈の行き過ぎであらう。とすれば、どんな小さい型の聖書にも注釈をつけておく必要がある。さもないければ、生涯の必読の書と言われるバイブルは、勝手な読み方をまねがれぬのではないだろうか。

(大学工学部助教授・独語、外国書講読)

ふるさと

高田 峯 尾

東京の様な都会に生まれ、そこで育った者には故郷はないと人はいう。ふるさとと

いう言葉が近頃いやにはやっているようにだが、何かしら、しらじらしくて厭味だ。明治生まれのせいかもしれない。ふるさとなるものは私の場合東京の下町で、昔根岸といた所だ。天保七年出版の「江戸名所図絵」という二十冊本がある。長谷川雪丹という画家によるもので、まことに念の入った江戸の名所や風物が描かれている。

根岸の里の図として、自然のままの竹を折り曲げて作った垣に沿って小川が流れ、枝折戸をあけて出て来たおはぐろの女房がそこにしゃがんでいる魚売りの方にざるを出している。梅の花がさいている庭にむかった小座敷では隠居風の男が中年のちゃんまげ男と碁をさしている。凡そ静かなのどやかな場面だ。この頃時々テレビの時代劇に根岸の里が顔をチラッと出す。吉原の大名がきのおいらんが出生生に來ているといった様な設定である。おそらく見ている人々の大部分には根岸であろうと目黒であろうとたいしたちがいはないのだろう。昭和二十年四月の空爆を境に根岸の里はこの世から消滅してしまった。いまやみじめな赤線地帯に変わってしまった。しかし、名

所図絵にあるそれと同じとはいえないまでも、それに近い佇をもった根岸の里は私の追憶の中にまだ生きている。かつて高い黒板塀をめぐらした加賀百万石の下邸が上根岸にあり、それに隣って輪玉寺の宮の隠居所があった。宮様の去られた後に、邸は転々として主人を変えて行った。やがて大正のはじめになり父がそこに住むようになった。加賀邸もその間に住宅地となったが、ふしぎに住む人々は文人墨客が多く芸能人も珍らしくなかった。よく室生の家から謡曲や鼓の音がきこえて来た。筋向いの家には先々代の勘弥が住んでいたし、吉衛門の家も遠くなかった。代替りの度に持主となった人が何かしら建物をつけ加えてゆくので――父はアトリエと画の陳列室をつくった――一見広い邸内は雑然としたものになったが、宮家の頃の茶室風の建物だけは格別の品格があった。綸子の布ではられ、ひすいの引手をつけたふす間とか、途方もなくひろい杉の板ばりの厠とかは人々の目をみはらせたものだ。二つの池を流れでつなぎ、築山も木立ちもある千坪に近い庭は竹

(三十三頁へ)